

本書巻末部分の「会式執筆」の一項は、連句における法式と執筆の役割と連衆の附句の方法及び宗匠の附句の捌き方などの慣習に加えて連衆の座における心がまえの一部を列挙したものである。

例えばその一例を示すと、

- ・懐紙の結び方
- ・宗匠の座の位置
- ・筆硯の位置

などの定めを初め、前句に附句をつけるときの連衆と執筆・宗匠の対応の手順、一卷満尾の場合の執筆の役割りといったことを挙げています。

これは、連句の規則、座のしきたりのすべてではないが、先に触れたように、文政期ごろの俳諧興行の在り方を知る上で資料的意味を持つものであると言えます。

なおB本の内容は、句評、連句の心得等に加えて「和歌八重垣集」抜書、短歌行を含むものであるが、その詳細及びA本とのかかわり等については後日にゆずりたい。

の意味でA B両本に分離される以前の両本を含む原本の存在したことを推定することができる。

以下本書A本の内容について若干の考察を試みたい。

本書は、芭蕉の俳諧観をそのまま踏襲して美濃派俳論として継承されている部分があること、芭蕉の俳諧観が支考・廬元坊等を通して美濃派に変容している部分があること、そして現在まで伝承されている美濃派の俳諧興行の法式の文政期ごろの大意が知られることなどに、その意味があると考えられる。

それらの点について、一部例を挙げながら触れることにしたい。

芭蕉が「不易流行」について具体的な発言を見せるのは、元禄二年「奥の細道」の旅中のことであり、それは、呂丸の「聞書七日草」、北枝の「山中問答」などを通じて知られるところである。芭蕉における「不易流行」は、いはば常に新しさを追求し、変化を続けてゆく流行性が、不易・不変の本質につながるものであり、不易と流行とは不即不離、表裏一体であるとする俳諧観である。

本書における

「不易流行は俳諧の両翼にして何連かかたつ／＼ならんきのふ不易を捨てけふの流行に遊はんにはけふの流行ハ明日又古からん流行／＼と云て其流行の果はいかん」(2オ)

という冒頭の不易流行についての発言は、芭蕉の不易流行説をほぼ忠実に伝承しているものと見てよいであろう。

また、

「雑の句は常にすへからす名所などにてハ格別の事也」(9ウ)

の発言は、発句に季の含まれることを原則とし、例外的に名所などの句については「格別」であるとして雑の発句を容認する姿勢を見せているわけである。

これは「三冊子」にみられる芭蕉のことばとして示された

「名所のみ雑の句にもありたし。季をとり合せ、哥枕を用る。一七文字にはいさゝかこゝろざし述がたし」

を受けた発言といえよう。

これらの本書にみられることばから、本書の特徴のひとつとして、支考を通して伝播された美濃派俳諧の俳諧観のなかに、芭蕉の俳諧理念が濃く影を落としていることを指摘することができよう。

次に「姿情の前後」の項にみられる

「連哥は悲情なるものなれば情より入て理にならひ俳諧は俗談平話なれハ姿を先にせされハ理に落へし」(7オ)

「俳諧は附合を作ら須己の句をせ須俗談平話にて其座に有事其儘にいふ也」(40ウ)

などの発言にみられる「俗談平話」の語は、芭蕉の説く「俳諧は平話を用ゆ」(「宇陀法師」)として、平易な日常卑近なことばを用いながら、「俳諧の益は俗語を正す也」(「三冊子」)と説き「俳諧の姿は俗談平話ながら、俗にして俗にあらず、平話にして平話にあらず、」(「山中問答」)とした芭蕉の発言の真意とはやゝ相違があるように思われる。

支考の場合は俳諧理念としては「俗談平話を正す」を受けながら、実作の場合この理念が生かしきれなかったところに、後世批判を受けることになり、そうした支考の理念と実作との遊離が、美濃派の平民低俗といわれる部分につながってゆくのであり、そこに芭蕉俳論の美濃派の変容の一面をみることができよう。

する

2 朱筆書入れ

・ 2 丁ウ 10 行め

「万能も只一心のなれの果」の句について上部欄外に

「此附句ハ人ノよろこへとも心附也常に求てすへき句に阿ら須」と註記。

・ 18 丁ウ 10 行め

「小座敷闇き雨の行燈」の句の右側に、「雨に行燈のくらき小座敷」とする。

・ 30 丁オ 12 行め

「田を植る時は内義の飯焚て」の句を左側に「お内義も田植の留主ハ火を焚て」とし、作者略名を「平」とする。「平」は「童平」か。

・ 30 丁ウ 二行め

「飯焚て居れハ内義を取ちかへ」の句の上五を「火を焚て」とし、作者略名を「紅」とする。「紅」は「黒紅」か。

・ 30 丁ウ 4 行め

「嫁ひとり田植の留主はあふなもの」の句の中七以下を「田植の留主の不用心」とし、作者略名を「坊」とする。

・ 30 丁ウ 11 行め

「傘も此横町に袖ぬれて」の句の中七までを改め「横町ハ傘の志ふきに」とする。

・ 40 丁ウ 10 行め

「相部屋の寐ものかたりに月も更」の句を右側に「□侍と窓の穴から気を延し」とする。

・ 41 丁オ 6 行め

「藪入の留守を嗅て遊び人」の句を上五「出代の」とする。

・ 41 丁オ 12 行め

「駕籠すへて重きひ垣の廻り道」の句を「駕籠立て重きひ垣の在所」とする。

解説

本稿本の書誌については、先に触れたので詳述を避けるが、要点のみ改めて触れておきたい。

体裁は半紙本（21.8×14.7センチ）、和綴。本文は目次とも四五丁。本稿では、先号に続く二六丁表の途中から巻末までを取り上げた。

本稿本には同じ「俳諧獅：門聞書」の題名を持つ別本がある。仮にここで紹介する稿本をA本、別本をB本とする。前号にも触れたところであるがB本の本文冒頭に

「五竹坊獅子庵聞書略」

とあり、B本本文中にも

「此書は句評と題して五竹師行脚のミき里文政七申の春日模写するもの也いまた是に倍する書なから過し年写し置ける獅：門聞書に載る所ハのそきて記さす」

とあることにより、A稿本の成立を文政七年（一八二九）をさほどのぼらぬ年、B稿本の成立は文中の語から文政十年（一八二七）以後と見ることが妥当のようであり、A・B両稿本を以て完結すべきもので、五竹坊没年の安永八年（一七七九）以前からすでに筆写されていたものとみられ、それがのちにA B両本に書き分けられたと考えられ、そ

一文台の会には始終袴着用有へし

一執筆硯ハ文台の下右脇に置筆も硯宮に置へし

一一順出来文台を立発句二度よみ一順よミ名をも読へし名を讀時連衆老人宛一礼有へし

懷帟文台に置き附句一句又読へし

一懷帟ハ手に持て読へし

一附句出類時連衆の内其句御前句と云時に

執筆前句を讀あくへし其時句主附句を

渡すへし執筆更取もをなし扱執筆其句を

宗匠へきかすやうに一反しよむへし執筆懷帟

に書留て打越より其句へ二句又読へし

一附句よき時ハ右の通也宜しからぬ時ハ返し句に成也

此時ハ宗匠より執筆へ今少ししとある也其時

執筆前句を一反しよむ也

一打越より二句切によ無へし

一連衆席に徒く時一礼すへし用支有て立

時も一礼有又歸りに末座にて座すへし

一執筆裏の八句目にて月秣と名のる時素

秋をすへし短哥行ハ名残の裏三の折とも同し

一名残の裏の口にて裏一順と断るへし

一満卷の上執筆発句より一句つゝ讀へし名をハ読

に及ハ須挙句ハ二度よむへし誦終て一座

一礼あるへし但一順座附に名を讀される時

ハ満卷のうへ一順に名を徒けてよむへし其時も

又一礼有へし

「 44オ

文法

一文法は起語結語をよく心得て中に筆を

遊ハせ対なと慥にすへし其支につき其

品によつてもやうハいろく有へし何の法かの

法といへるも後に附たる名也

点式

一点式ハとかくすり句に古支有て点の句に高

点は成易き物也人之なよきとおもへハこそ其

句をも附るゆへ高点ハ素より也点のなき句の

吟味は成かたき物也ぬけ句を第一にすへし

白字十二点 朱字 八点

朱長 四点 朱丸 二点

引墨 一点 凡

「 45ウ

〔補〕

本稿本には同筆と考えられる墨書書き入れと、後年の異筆と考えられる朱筆の書き入れがみられるので、前号部分を含めて、ここに一括記しておく。

1 同筆書入れ

・ 27丁オ三行め

「智越そ志るは甥そ志る也」の句を「智越ほめるは姪そ志る也」とする

・ 27丁オ七行め

「質艸の旅に次郎の秣を泣く」を「質艸に旅の次郎の秣を泣」と

□□も愛つ冬の砂糖つけ

41ウ

此次の句打越むつかしけれハ如何と工夫せしに師云  
大坂か京か江戸長崎などより案すへし其処に居  
徒く故六かしく附する也砂糖漬の到来したる処を  
案すならハ附句ハいくらも有へし一ッ所にて案する  
ゆへ狭き也かやうの処ハ何方も徒けぬかよし殊に  
花前なれハ徒けかたき所也ちらと附て斯ハ是も  
なら須夫もなら須と捨て外より案すへしと也

又 湯の山の関のくけ道越すまし

寺か近ひか鐘かきこゆる

此次の句打越しにさはりて六つかし

小便に紙燭はいらぬ雪明り

又

障子にちかき湖の音

何集の名も隠し居る花の庵

此句上五文字武士の名と有しをかく直したる

よし又北国にて

葉はみな落て柿に三日月

同じ世に子作となりて焮を泣

北国にては地主を作親と云下作を子作といふ也

水眇くくと松の出はなれ

武士一騎見返類城のいとま乞

耳におほゆる浄土寺の鐘

又

42ウ

川遊ひ殿も御側も腹減りて

女あるしの留主もぬから須

此附句内の□来して附句に寺のお成のと附るは  
悪し在家などへ殿のおしかけ給ふ処と見てかく  
附待る也

又

月にいさ百度参りの影ほとき

出わひ光しやなひ稲の波

又

庵の戸も春ハ朝寐にまた明す

馴染は掛の出来る豆腐屋

此句にても附きなからおもハしから須豆腐屋を  
無理に拵て案したる也爰ハ其隣などの事にて  
附れは自然と附也

稽古の鞠のそれる壁越し

又

男さらひは神もとかめ須

飲ふりにのまぬ薬もあたこゝろ

又

夜なへも留主の伽に行燈

精進日の狩は渡世と云れかち

会式執筆

一懐帨緘様結び目を上へすへし毎も立懐紙也

一下懐紙緘様有之口伝

一文台の左脇宗匠の座也

43ウ

43オ

萩さけて畠へ是ハおやちさまとの

ケ様に裏に至りてハ云語にて和くへし又云表に  
神釈恋名所人の名物の名などむさと出さゝる事

常の事也是も表句にならねは常ハ決してなき

事と知へし所の名医者なども遠慮すへしされと

奈良漬奈良団扇などゝ其姿の用になる時は

奈良の用なけれハ苦しから須それも奈良の糟漬の

奈良の団扇などゝ目立たる時ハ無用ならん

素春素秋

素秋ハせぬ事也素春ハへし月の多く花少きか

ゆへ也されとも秋の発句に月星など指合是非なく月

のならぬ事も有へし星月夜のと古今抄に出たり

撰集

集俳諧の曲節といふハ多くハ裏より名残の裏に

有て始終は例の地にてすへし先一卷ハ地かち

にして曲節は間／＼のもやう也古今抄に四折の

曲節の事あ季考へし扱集俳諧の心得といふ

ハ一座の拍子を失ハすして五句も三句も徒けて六つ

かしき運にいたりなは茶か酒かに気を転してかな

ら須理味に落いるへから須

附合難話

俳諧は附合を作ら須己の句をせ須俗談平話にて

其座に有事其儘にいふ也前句より出て前句に

附る也

相部屋の寐ものかたりに月も更

┌  
39ウ

串柿ぬきて此月も百

附句出かたき時は能／＼案し工夫すへし先師の

二句案し給ふ事二句も案したる時は其句耳に

立物なれハ耳にたゝぬやうにさら里と句作る

事功者也

桔梗か着たひけれと□賃

是等にて二句の姿を志るへし

藪入の留守を嗅て遊ひ人

かく云前句に恋を附てはおかしミを失ふ是は

藪入のまつしき家の体也遊ひ人徒なかれて居る

入用ハ見出須へし

木綿煮る鍋とも志ら須焼てやり

又

駕籠すへて重きひ垣の迫り道

売想のあつた穴村の灸

是は山里の重きひ垣の辺りに駕籠を居て宿る

用を見るに立影などゝ見るは面白から須在所の灸

点などをたのみに来る病人と見て扱宿るこゝろ

有よ里穴村といふ名の宿にくき名なる故也かく句

作りてよし

過たやら山は談儀の鉦か今

大根も引て仕廻ふ雪前

かゝ類大きなる附合も度／＼ある事也

又

乗物へ気を徒ける御寺院

┌  
40オ

┌  
40ウ

┌  
41オ

見越入道ハ青鷺の事也きこへかたき句の次に  
てハ其事をとく法也

三升鍋の出店にはなひ

斯のとき煮類時を附るゆへ聞える也

都ときけハ何の宛先

此頃着よこれでおれと小袖の名ハ残りと附て其後  
いへる集などには

挨拶も目には涙のかくしあへ

前句の字一字を見て附る事は

今年も雪の山茶花にふる

手習ハあからぬ物とおもハ累

此句もの字に附たる句也さなくとも附たる句なれ  
と前句の要なる字を見付て能附たる也起情  
にても

平句哉留

平句哉留つゝ留習ひ有やうにいへとも殊更と云事  
なしとかく前句の繋ぎ志ほり也

かねのなる木に雪はふりつゝ

此格の句ふり也

うき時は哥になくさむ祇王妓女

使の人に冷めしもかな

哥に慰むに哉と繋きたる也餘里好むまゝ  
から祢は常ハせぬ事也

季移

式は冬季より秋季などへ移る句

37ウ

嘘徒ひて迫る霰の俄ふり

此句月の打越し也此次平句にても苦しからねと秋  
季呼出須時は季節耳に立ぬやうにすへし

御酒には神の氣も濁る筈

恋句論

恋の句はかなら須二句徒くへし一句にては捨まし  
き也されと心の恋にして昔いへる詞の恋にあら須  
詞に恋と見へても恋にならぬ句あり

上書も男の状に似せてかき

此次恋と見て附るは悪し男の留主して居る女也

三十日に物もおもふ小拂

旅体に旅体附へから須旅ハ多く食類衣類など  
にてあしらひ置へし旅の附合には旅の用も  
重ねすして附方有へし運ひむつかし九なる物也  
恋の句もをなし恋の用も附る時はむつかしく成也

尔留

尔留ハはの字ばの字との字この字此内の字入  
れは留る也

鈴かけて出たれば馬も嬉しけに

表句裏句

表句裏句

表句のふり裏句のふり有り野郎傾城娘嫁など  
の名目恋にあらねハとて表にきらハ須といへとも  
表にならぬ句ふりあれハ先はせぬかよし表へ此類  
を出しては次先徒かへて面白ミなき物也表ハさら  
／＼とふしなきやうにすへし裏にいたりてハ

38オ

39オ

38ウ

師直は萩の花ちるの繋ぎ也使の処にて変化する也  
前句を大名と見て此句ハ□頃もちと作る

鯛にあるとははちあたり也

前句こなし

前句こなしといふは長崎行脚の頃女叟か連中の会

にて如叟か句に

取ちらしたる源氏狭衣

といふ句あり是等加十か附たるに句ふりのぬめりたる

故坊いかつて此処はきたなき物にてこなし須へし此次ハ

かく然るへし

雪隠もはて須使の待わひて

と附られし也雪隠はこなし待わひてハ志ほり也

無用の用

無用の用を志らされハ俳諧にうとし

さい箸に温飴あまの釜をけ婦たかり

初の五文字煮立るともゆてかゝるとも有りて然るへし

にささひ箸の五文字添たるは無用なれとも此五文字

片はたぬきたる様大釜に懸る姿まであれハ是

を無用の用といふ附句ハ尚す□第一也

三段案様

附句より三段の案し様有

笠寺や□敷さます一すゝみ

二人していさ大きな爪

裁物に麻の切はしよろこひて

此第三先前句を見るに二人して大きな爪とは

周松

其角

翁

「  
36オ

女のさまと見て婦たりしてといふに心を徒けて裁  
物と趣向をさため三段にいたりて句作るへし  
是常に入用の事也

三句の味合

禪の志めり加減も雨けしき

座頭ハ耳て旅をするなり

御亭主の名も源五郎の□ひたし

又三句目の変化

枝折戸の奥ハ志くらき杉松

御為なからもおしむ御くし

はやり風脉伺ふに及ハねと

是等の句にて三句目の変化を考へし

撰集の句

地と集との句作りを以いハム

連哥師も古臼造りも妹の旅

といふに縫印して唯に手ぬくひといふ句附て其

会は済んで師云此処へ附るといふ時ハ

おはきときけハ少し耳寄

是ハ地也又集俳諧にて曲節の場ならば

ひもしか原のお萩花さく

若花の句に近き時は

ひもしか原のお萩恋しき

又集のもやう集のふりなと云時は

爰もたゝ広ふ陸奥殿の領

田廻りか見出し入道志たかえて

「  
36ウ

「  
37オ



盗人に徒れそふいもか身を泣て  
此句ハ留主をして居る女か盗人を氣遣ふと誰しも  
氣の付也是を翻転の法の句と言其人に成て  
附る事第一也

附合二句の姿

前句形なきに二句の間に姿出来也

曆には物たちよしの□屋徒け

猫の泥足志か類椽先

前句に形有て附句に形なき二句の姿ハ

背中にたまる雪掃てやる

鈴鹿から替て戻れハよかつたに

附不附論

附合は前句の胸中をさかして趣向をさたむへし

出羽坂田にて斗南曲尺俳諧論有り

おはくろの口はつかしう袖覆ひ

盆に入れ袂ハ取らぬ孤僧

斗南

といふ附合を自讃せし此句不附物唯の趣向はよし

されと虚無僧にてハ徒かす例の己か句也前句の様ハいろ

めきたる様也其物もらひハ伊達なる三味せん引と

見て

三味せん引の取らぬ手の内

形あらハ三味せん引にて二句の姿あり又孤僧の句

ならは前句違ふ也

浪人の内義ほどあ類こゝろいれ

盆にいれ袂はとらぬ虚無僧

┌  
34オ

┌  
33ウ

としてよく附也と申されけれハ安倍の貞任宗任など  
美名有俳人も我折たるよし是等離附を考へし  
砂場の姿の端に四五本  
とやらいへる前句に

組打に骨折らしたる膝かしら

此句徒かす前句をとくと見ハ六部の古戦場など

思ひ出し鉦など叩く有様残るへし前句違ハ附くへし

むかし咄に囲炉裏取りまく

組打に骨おらしたる膝かし羅

句の変化

句の変といふ事阿り前句を我物にしてこなして附る

也前句ハいか様にも附句に従ふ物也先師曰附句ハ前句

を見立て人を豎に置ふと横に置ふと自由

なる物なりと云り

足弱つれにこまる逢坂

といふ句を自由にこなすに逢坂の関といふより変を

附たる也是を参宮人などハ附てハ面白から須平家

落の人と見て足弱つれハ繫く也平家などといふ

言葉置くなるゆへ上の会釈あしらへハおかしからず

其置くならぬやうに一句にをかしミ附へし

ゑりつきに神も平家を捨給ひ

足弱つれと云女のすかたあれハゑりすぎ神と会

釈したる也又附合の変化といふは

机の先に萩の花ちる

師直の折く使おこされて

┌  
35オ

┌  
34ウ

朝起をするも一つの孝行しや

妹背の中にさへんな嘘

前句の実に附たる所は虚に附る也前句をうこ

かすともいふ

立仏蓮花を下りて火燧哉

飯のすゝめに入る集錢構つづみ

句の論前に出たり前句の虚を実に附る也又北国

にてこまひかくとやら壁ぬるとやら入□前の句に

和尚の貞をやかて見る筈

のかぬ屋うまた赤豆飯喰たかり

是等を俳諧の虚実といふ也前句を虚に見て

附たる也

死活

句の死活といふは句作りの按排にして死も活もする也

白帷子のミな都鳥

投ふしの古さに三味を引さして

此第三死句也なけふしの古さに三味を出るハ理屈也

投ふしの古さに琴をあしらひて

斯句作あるは活句と成也又美濃文通に

卯月にへもなれハちらく飛螢

小僧預た山へ言伝

此句小僧の宿から山へ言伝にては面白から須小僧

の居る山よりなしミたるよし和尚の言伝と見て

小僧も山に馴る言伝

琴左直しのよし死活も是也

見聞の法

附合に見聞の一格有松の花集

蕎麦切と月夜ハあら須いつとも

すたれ明れハさゝ波の秋

雁かとて耳そは立る琵琶法師

此様に來る処後の句より見てハ何連も湖のやう也

見る事ハ附かたき故聞事を附る時間ととも一句

の姿なけれハなら須

二句一意

二句に一句とも云地の巻にもたひくある也

茶釜の尻も留守の下冷

荒た手に物うき綿の賃仕支

使も鼻をかむもらひなき

此附合前句の二句をひとつにからミて後の句を付た

る也

疊字疊語

古今抄に委し拍子にて疊む

浪に拍子を徒けてさゝ波

さゝ波や雪の花ちる宵月夜

又疊字も下へ徒けて疊む事も有へし是も又

一格也姫路にての脇

かくれなきたとへに照るや紅の花

笠の行衛も夏の穂かくれ

里紅

翻転の法

更て鳴子の音を氣遣ふ

32オ

31ウ

32ウ

33オ

両吟の巻に

あたらし橋の焔もそこから

草花も市の出かけのいき／＼と

是はいき／＼といふ言使に心を津けて見れハ其市へ

出たる人の用あるさまを見れハ乳母の夫ともいふへし

夫なからも御乳ハ見ぬふり

人の事にちゝめて情を起すなり

延句別名

延ると走ると逸るとに□ありをなし延る内なれ

とも少し徒々味合あり

延句

延ると八月華景色などの句にて急に成処を

延る也其場にて大方かゝる処をかゝらすに行ゆへ

に延るといふ走り句は拍子にかゝつてはつミ有句也

拍子附も大かた似たる物也

逸句とはもつれたる処をほとく也徒げにくき処は

多く逸句をする也延句の軽きもの也

繋志ほ里

附合をな須に前句をとくと案すへしさあれハ附句

おのつからうかむへし附句より案すへから須とかく

二句の間の透明さる様に句作るへし志からハ附句ハ

前句に徒かぬ物を趣向にして句作里にて前句へ

繋き志ほるかよし前句は外を□てつかぬ物を

趣向にして前句へ繋くへし是秘中の法と云也

新商人の尻も徒まけ須

「 29オ

田を植る時は内義の飯焚て

此句趣向斗にて句作の繋きあし附かざる也

飯焚て居れハ内義を取ちかへ

取違ひの詞にて徒なきたる也

嫁ひとり田植の留主ハあふなの不用心もの

あふなものと繋きたる也前句に成て附る事第一也

花盗人の若衆いけとる

一山か□頭に奈良茶の俄事

此上の五文字評定へと直したりいけとるに評定ハ

徒なきたる也繋くは前句の理也前句の志ほり

といふは前句ハ利ハなけ連とも移りあるをいふ也

傘も此横町に袖ぬれて

犬も夜中を丸マツふ寐て居る

此は其場にて横町に犬の趣向ハさる事ながら

丸マツふ寐て居るの無用ををそるへし

犬も夜中を早マツふ起て居類

斯あらは前句の袖ぬれてといふに志ほ里て其姿

もあはれにそ聞え侍る是を二句の志ほりと云

招く尾花の細きちかミち

藪入のまたかと母のもの狂ひ

此句尾花の招きに物狂ひハ志ほりなり道理なき

言語の上也

虚実

虚実は一巻の変化の為也附合も此心得有へし

□の店に塩ものもなし

「 30オ

「 30ウ

「 31オ

此句次郎に不動院を向ハせて附たる也

色立

此案方は哥に

都をは霞つやともに出しかと

秋風そふく白川の関

能因法師

其後頼政の哥に

都をはまた青葉にて見しかとも

もみち散しく白川の関

といふ哥是を等類といふ沙汰有り定家卿のた

まはく是は等類にあら須頼政か哥ハ色立なりと仰

られしよし俳諧にも青葉に白赤などの色立也湖の

白波に□崎の朱の鳥居を付るもいろ立也

伊吹の山を田の上に見て

桃いろの嫁入り通る馬の鈴

伊吹山も田の上もミな青くとしたる所へ桃いろ

と附出したる色立也

拍子

此案方ハ送句の曲節にして稀なると時のもやうに

する事也

一いきに酒二三盃津かまつり

松は松風浪はさゝ浪

又

寒さむひかと座頭に頭巾ぬいてやり

先茨木や津かむ評定

起情

┌  
27オ

此案方は常に仕かたき物也今も請合ふて起情の

句せんといふ事ハならぬ物也扱起情といふハ二句も

徒々きて送たる時ち々める時の用也わつか一二字

の言使よ里情は起る物也其言使に少しにても体

あらハ起情にはあらて節となる也是等も有心の

別名と知るへし

縁日の鐘に御山は雪ちりて

祖父の言葉の案にたかハぬ

此句縁日の鐘に御山ハと云ハの字をとかめて起し

たる也今毘羅彦山などの珍しき其所を見附て

外は長閑なるに御山はあれると見て案に違ハぬ

とハの字にて情を起したる也

志くれにくもる短檠の影

枯はてて柳はすんと月のいろ

佐藤兵衛か内義ほとあ類

柳はすんといふ手尔波をとかめて情を起したる也

五六本田中の松のあっちこち

おれは狐にたまされたやら

此句起情也あっちこちといふ言葉に体なし其詞を

とかめて我は狐にはかされたかと附たる也起情は

前句を咎て起し節ハ前句を咎めて徒けるなり

かたちと手尔波の違ひ也又起情の内に地と節と有

へし祖父言葉ハ地也御山ハのハの字にて起し佐藤

兵衛の句ハ節也すんと云詞にて起したる也又送句

徒々きたる時ハ人にてち々むへし森何子と廬元師

┌  
27ウ

┌  
28オ

┌  
28ウ

## 『俳諧門聞書』(解説と翻刻)(続)

小 瀬 渺 美

Haikai Shishimon-Kikigaki:  
Introduction and its Reproduced Text

Hiromi Kose

## 凡 例

- 一、丁数は各丁表・裏の最終行の下に一丁表を「<sup>1</sup>オ、一丁裏を「<sup>1</sup>ウのように丁替わりを示した。
- 一、各行の字数は異同があり、二十字から二十五字前後にわたるが、原本の各行の字数に従った。
- 一、句読点、濁点は加筆せず、原本どおりとし、一部変体仮名を現行のひらがなに改めた。
- 一、難読・不明箇所は□で示した。
- 一、文字の表記は原則として原本に従い、文字及びかな遣いの誤りについては、該当箇所右側に(ママ)を付して示した。
- 一、同筆と思われる墨書書き入れ、異筆と思われる朱筆書き込みが十数箇所みられるが、これを〔補〕として最後に挙げた。

## 会 積

此案方は句毎に有て多く会積なれハ地の案方  
也道具か衣類か食物かにて軽く会積ふ也

落人もあるし夫婦にいたハられ

けふは裕を祝ふ朔日

衣類の会積也

うたれた後も美しひ雉子

女房の美 も耳にとゝめか年

美しひといふ言葉に女房と会積したる也

迹 句

此案方ハ運ひの附過て段／＼むつかしき時程よく迹る

事にして多く天相ふり物萬木などに会積迹る也

両肌ぬけハ下へすぬける

打水に垣根の木爪のいき返り

又

手造りの酒にいさめる神なれハ

かゝみに晴て返る村雨

向 附

此案方ハ有心の別名にして物なき処に物も川て

むかへは是を向附の案方といふ也

聾はめるをそ志るは甥ぬそ志る也

挨拶の白も木挽の御尤

又

質艸にの旅に次郎の妹を泣

顔にこゝろは似ぬ不動院

「  
26ウ

「  
26オ